



優しさのバトン ～見てくれている人がいる～



校長 神田 朋恵

いよいよ年度末を迎えました。紅白の梅の花が見頃を迎え、子どもたちの頑張りを色鮮やかに応援してくれているかのようです。今回は、私のもとに届いた、心温まる声の数々を紹介します。

低学年の子どもたちが、学校公開日に地域の方々と「昔遊び」で交流しました。その後、子どもたちは感謝の気持ちを込めてお手紙を書きました。ある地域の方は、その手紙を玄関に大切に貼ってくださっていて、訪れたお客様に「これは何ですか？」と尋ねられるたび、嬉しそうに経緯を話してくださっているそうです。子どもたちの思いが、しっかりと地域の方に届いていることを感じました。

また、学校だよりを通して「今どきの子どもたちや保護者のことがよくわかる」とのお声もいただきました。学校の思いが地域に伝わっていることに感謝し、今後も一層努力してまいります。

先日行われた第2回スクールサポートネットワーク全体会では、こんな声が聞かれました。

「卒業のとき、保護者の方がわざわざ挨拶に来てくれた。子どもが“いつもお世話になっている”と話してくれたからだそう。見ている人は見ているし、わかっている子はちゃんとわかっている。」

「一人でもいい。誰かに、(この挨拶やこの思いが)届いていれば、それでいい。」

「困ったとき、ここにも大人がいるって、子どもたちにわかってもらえたらいい。」

「以前は、自治会のお祭に自分の町内の子どもしか招待していなかった。でも、今は違う。この学区の子どもたちみんなに楽しんでほしい。それが、これからの自治会の活気にもつながると思う。」
地域の皆様のおふれる愛情を学校は大切に受け止め、子どもたちにしっかり伝えてまいります。

ある6年生の児童は、6年生初日に、先生から「挑戦・笑顔・感謝が大切」と教わり、それ以来毎日意識して過ごしてきたそうです。「私には仲間がいて、一緒に頑張ってくれる人がいて、応援してくれる人がいて、とっても幸せ。」教師の思いが、子どもの心にしっかり届いていました。

4月から取り組んできた『おはようメーター』(その日の気分、体調、朝食の有無、睡眠時間)では、気になる子に声をかけ、担任と情報を共有しながら日々見守ってきました。1月末、ある児童が「気分が悪い」と入力していたので、私はいつものように声をかけました。「どうしたの?」「ここに“悪い”って入れたら、話ができると思った。話を聴いてほしかった。」その言葉に、思わず涙がこみあげました。私たちの思いが、確かに伝わっていたのです。

「見ている子は見ている。伝わる子には伝わっている。」そんな感性を、これからも育てていきたいと思います。たとえ今は気付かなくても、子どもたちが年を重ねたとき、自分がどれだけ大切に見守られていたかに気付く日がきっと来ます。そのとき、彼らがまた誰かに優しさのバトンを渡してくれる…そう願っています。

結びに、本年度最後の学校だよりの発行にあたり、卒業を迎える6年生と各学年の過程を修了する1年生から5年生の皆さんの新しい学年での御活躍を心よりお祈り申し上げますとともに、この1年の保護者並びに地域の皆様の本校教育活動への深い御理解と温かい御支援に深く感謝申し上げます。子どもたちのために共に取り組み、力をお貸しくださった皆様、本当にありがとうございました。